

## 唯物史観と宗教

永田 正

### (一)

今日世界各国に平和運動というものが起つてゐる。政治家のみならず学者も十分にこの運動には関心を持つてゐるに相違ない。しかし関心を持つただけでは平和は得られない。平和は武器を捨てることによつて得られるのであるか。或いは「備えあれば憂ひなし」とかいう言葉で、軍備があつて始めて平和が得られるのか、或るひはこの人間社会には戦ひは永久に避けられないものか。これらの点を十分に研究されなければならない。何故かなれば、政治も、経済も、法律も、そして宗教も芸術も一度戦争が起ることによつて最大の変革が行はれるからである。

人間の真心からの叫びは「平和！」でありながら、現実には西独も、日本も、戦争の手段であり、或る時は目的でさえもある再軍備へと進んでいる。これは何故であるか。政治家、思想家、学者等が多種多様の考えをのべているがその中で尤もらしく思われ、しかも我が日本人に最も信じられている点は次のような説ではなからうか。

日本が再軍備しない場合、共産主義の中国及ソ国が侵入してくるであらう。又国内では共産党の破壊的暴力の革命

運動が起るであらう。そのためには、再軍備は緊急必要事である。共産主義——唯物論——機械的——無目的——宗教否定——道義心退廢——暴力——破壊という従来の観念論者等の自らの独断的の推理と判断からして結論を引出して、これを一般国民に宣伝し、再軍備をあをてゐるという事が事実であるといえる。この結論からして、宗教家は、わが意を得たりで、唯物史観と唯物論の区別をも認識しないで、世界の平和は宗教の力でなければ絶対に得られないと叫んでいる。しかも彼等は口ではそう叫びながら自らの精神力否神の力が信頼出来ないの、武器を頼っているのである。寧ろ武力によつて宗教を守るという逆現象が起っている。何故かなれば、世界各国の唯心論者である政治家や学者は再軍備でなければ平和は得られないと叫びながら、絶対性の神仏を朝に夕に拝んでいる。「右に剣を持ち、而して經典を説く」の状態である。宗教力で武器を収めるのでなく、武器で宗教力を助けるのである。

右のような意味で、唯物史観はこのような宗教を如何に見るかを再確認する必要を感じて、自己の体験と諸学者の著書を参照して論じてみたいと思う。特に現在多くの新聞にも見られる通り、多数の邪教が新興宗教の名の下に乱立している秋、この事は最も日本国民には重大なる問題であると信じたので敢て菲オを顧みづ日頃の研究の一部を発表するものである。

## (二)

この論文を書くにあたり、先づ何よりも注意しなければならない教点を述べなければならない。それは唯物史観について一般の人々に誤解があるからである。

第一、唯物史観が、ギリシャ時代の自然哲学的で論じられた素朴的の唯物論と同様視されていることである。即ち機械的であり、無目的であるとされていることである。これは大なる誤りである。若しそのように誤解されると唯物史観は、進化、進歩、発展そして創造ということが解決出来ないことになる。延ひては一切の文化現象が説明出来ないことになる。唯物史観は、唯物論の中に史を挿入していることでも分るように、史的発展が含まれているのである。必然的發展性を論ずるところに真理があるのである。

第二、従来哲学が形而上学的の觀念論に捕はれて、只單に沈思黙考をして、頭の中の形式論理の研究にのみはしりカント哲学でいう先天的(アプリオ)とか範疇(カテゴリー)とか、無上命令の如き形式のみに捕われて、今日急速に進んだ自然科学特に物理、化学の研究をおろそかにした点があるのではないか。しかもその物理と化学とに於いて今日では両者の境界線が取除かれて、理論物理学として最高度に發展したことも併せて哲学者は研究されねばならないといふことである。

第三の点は第二の点からして必然的に生ずることであるが、唯物史観を説明する場合に最も重要なことは、物質の

概念である。ギリシャ時代に「万物は水なり」とか或ひは「水、空氣、火、土より成る」とか主張していた極素朴的の物質の概念が今日の電気、磁気、エーテルに、或るひは中間子の如き高度に物質の概念が發展していることである。例へ専門的の見地からして、哲学者や、經濟学者等が自ら物理化学を研究しなければならぬといふのではないが、其の方面の学者等の研究の結果は矢張り、常に参照して、それに平行して、自己の専門科学も研究しなければならない。何故かなれば、自然科学と社会科学及び人文科学とに区分したといひ、それは各学者の研究にあたつて時間と経費に無理があるからして、便宜的に区分されたものであつて、一切の現象は少し極端かもしれないが、自然の中で現われる自然現象であると思はれるからである。

今日の物質の概念は、單なる個としての分子としての存在をいうのではなく、現実に現われる姿に於いて、千変万化の現象そのものとしての物質を認識しなければならないのである。個としての単独に切り離された物質の概念はもうすでに現今の物理化学を認識しない、素朴的の唯物論から一步も發展しない学者の無知を暴露したものだといえる。是の如き学者には、今日よく論じられている「量より質への發展」も十分に理解出来ないであらう。

第四には (naturally) 「自然に」 (necessarily) 「必然に」の關係である。唯物論の段階に於いては「自然に」であつて「必然に」とはいえないのである。なぜならば、「機械的に」であり、「無目的」であるからである。併し唯物史觀に於いては「自然に」の場合もあり又より發展して目的々であるが故に「必然に」である場合もあり得るといふことである。唯物史觀の場合の「目的々」といふのは觀念論でいう「目的」とは區別しなければならない。觀念論に於

ける「目的」は觀念的の唯一とか、永久不変の所謂絶対的神的の非現實的の偶像的の目的をいうのであるが、唯物史觀に於ける目的は、自然の中に生活している人間生活の中に、自ら發展してゆく過程での必要から生ずるところの目的であるからである。この事は最も重大なる考え方である。前に述べた如く、唯物論と唯物史觀とを混同した場合に如何なる誤つた理論が生れるかという、例へば唯物史觀論で、「資本主義から必然に社会主義へと發展する」という理論を主張する場合に、この「必然に」と「自然に」とを混同して、社会主義の政治運動など無理に起さなくとも自然に改革されるではないか、という誤つた結論を出して、社会主義運動を皮肉るということになるのである。この事は（以前に昭大政経論叢でも、小泉信三先生の理論に対して反対したこともあるが）哲学的而も現代の理論物理学が發展して、物質の概念又は量より質の問題をも理解した唯物史觀という哲学を、十分に研究しない学者が良く誤解し易い問題であるからである。

第五には意識の問題である。人間の意識とか或ひは又理性とか悟性とかが神から与えられたものの如く誤認している一般人のみならず觀念論者が未だに多いといふことである。

私は唯物論及び唯物史觀を研究する人は先づ最初に英國の經驗論の哲学を読んで戴きたいと思ふ。「イギリス唯物論及び凡ての近代經驗科学の眞の創始者はベェコンであつた」とマルクス自身が主張している。意識の問題にしても極言すれば、意識とは人間の頭脳の映写されたものゝ發展して生じたものである、ということが出来る。実験心理学でも研究している印象とか残像とかもつと進んで記憶とか凡てわれわれの経験に基く有機的感覚性の史的發展より創

造されたものである。この論文は唯物史観を讀者がすでに認識されたものとしての論文であり唯物史観そのものが目的ではないのであるが特に意識の問題は重大であるから、この問題に就いては西田幾太郎先生の哲学を熟読して戴きたい。そして最高度の観念論的西田博士の意識問題に対して十数年間西田哲学の研究に没頭していた牧野氏の「西田哲学への対決」を読んでもらいたい。物と心を切り離して二元的に考え、而も心が主とし物を従として、心が物を産むなど、ということが観念論者で、われわれは自然という物が發展して最高度の人間という動物が発生し、その發展した人間の頭脳という一種の最高度のカイラの作用からして、精神現象を創造したのであるとするのが、唯物史観だといふのである。デボリン曰く「唯物論者にとつては現象は我々のための物であり、または容驗自体の写しである。物質的自然發展が一定の段階に達して人間と人間の意識とが生れ、人間がこの意識的活動を通じて物質的自然をば漸次より精確に反映してゆくそこに認識の發展があり、真理の把握がある。我々の認識とは物自体の観念的把握であり今まで不知であつたところのものを知識の対象として現象せしめることである、物自体はたしかにそれが我々の認識作用以前の客体的存在である限りにおいては我々の主観を超越したエトワスであるに相違ないが、このエトワスは、決してカント主義的のいうような永遠の彼岸にあるものではなく実証科学的認識の進歩の發展につれて刻々に内在的対象化されるものである」と。物質の量的の種々様々の変化から諸現象が生じ、それが人間の頭脳というカメラに映写されたものからして、山や川や海という言葉が作られるのである。決してカントのいう無上命令的、神的东西のものが与えられたものではないのである。自然の中に最高度に「量から質へ」と發展した人間の労働の、努力の、研究の決果の諸観

念である。唯物史観は、観念そのものが無であるというのではない、人間が自然の中で、自らの發展した努力によつて創造した形式であるというのである。只形式や観念が現実なるものを創造したということを否定しているのである。山と川の物質的の變化を人間が山とか川とかを名付けたのであつて、人間の山とか川とかいう抽象的の言葉が山と川を創造したのではないというのである。

— × × × × × × × × × —

以上の唯物史観の立場から、宗教と名付けられた諸現象を説明してゆきたい。

(三)

世界を挙げて『平和運動』が叫ばれている。平和を悦ばぬ者はあるまい。要は如何にして平和の社会が達せられるであらうかにある。キリストは『人間は生れながらにして罪人なり』といつて、人間の種々様々に現われて来る欲望の悪い姿を強張して、凡ゆる人間の間に生ずる闘争を警戒している。性悪説とでもいうか、悪人に対しては武器をもつて防ぎ、或ひは武器をもつて撃滅せんという考えから、平和を守るために武力を用ひるも止むを得ずと主張する人があり、政党がありそして国がある。たしかにこの説にも一部の真理がある。何故かなれば人間も、もともと野獸と同じ物欲があるからである。日本の仏教哲学の権威者であるとされた最澄の「一念三千」の観念的世界もこの人間の二大欲望即食欲色欲の發展段階を示してゐるに過ぎない。即ち天台哲学の論ずる三千世界の根底を成すのは、地獄、

餓鬼、畜生、修羅、人、天、声聞、緣覺、菩薩、仏の十界である。天台哲学の特色は、この十界の各々は他の九界を具すと主張して、百の世界を導き出し、この百界に、相、体、力、作、因、縁、果報、本末竟の「十如」ありとして千界を導き出し、その各々に更に五陰世間、国土世間、衆生世間、即ち物心の原素の世界、無機物及植物の世界有情の世界三種の世間ありとして三千世界を立て「此三千一念の心に在り」と断定するところにある。「一念」は一心に三千世界が具せられてゐるといふことである。われわれ人間の物欲が、われわれ各々の知能の發達の程度により、右のように表現される世間或いは社会、国家が實現されてゆく段階が示されているのである。人間の二大本能とされている食欲、色欲が人間社会の凡ゆる文化現象の原動力の最大なるもの、一であることをわれわれは否定出来ない、マルサス人口論に於いてもこのことは、二大公準として認められていることである。併しこれらの二大本能に自ら發展性があるだけに、人間同士或るひは人間と他物との間に衝突することにより、マルサスの所謂戦争、饑饉其の他の悪現象も起るのは当然であるし、又和合することに依つてより高度の文化現象即ち善美の現象が創造されることも当然であらねばならぬ。東洋哲学でいう荀子の「性悪説」となるは前者の場合をい、孟子の「性善説」は後者の場合をいうのであらう。

性善か、性悪か、何れか一方でなければならぬという説にわれわれは深く考えなければならぬ点がある。真理は唯一無二、永久、不変でなければならぬという旧来の形而上学的の哲学に無理があるのではなからうか、唯一とか、不変とか、静とかはすべてそれは観念論者が認めるものとされた形式にすぎない。観念は一瞬の静止もなく変化する現



実から、人間生活の安定のために、抽象化して表現された形式としての言葉にすぎない。現実には1もなければ2も3もない。△形も□形もない。点もなければ、線もない。それらは皆、物質の発展、創造過程においての表現からして、抽象された形式である。1とか2、3が又は△形や□形や○があつて現実が創造されたものではない。従つて自然の中に育てられた人間も物質として幾億年かの創造的進化によつて生れた動物である、自然から離れたもの即神が創造したものではない。それは恰も、精液という一原子的の物質が母の体内に於いて、母の食糧によつて進化發展して一人の人間として創造されていくことや、一粒の朝顔の種子が太陽、空氣、水其の他の自然という環境の中に美しい花を咲かせ、実を結ぶと同じであり、各々自然の中で、環境のお互いの物質的の協力で創造されたものであつて、決して神の力によるものではない。それ自身が自らの力で、他物質との協力からして生れたものである。

右のことからして、いま此處で主張することは、性善説にしても、性惡説にしても、それは人間自身の有り方で何れにでも定められるものであつた、先天的とか無上命令とかによつて定められるものではないということである。従つて今日の「平和建設」に當つて、人間の惡をこらすための武力即再軍備で平和を建設するとするも、又は人間の知識力というか、教養力というか或いは道義心というものによつて、武力即再軍備することなくしてこそ平和は建設出来ることとするも、要は其の国々の国民の实体としての、知識、教養のあり方に依るものであるといえるのである。

現在の世界の最も重大なる問題は、如何にして戦争を避けるかにあるといえませう。若し人間が、知識を持つ動物であるとすれば、現在の人類社会に於いて、一個人が自己という一個人のみでは絶対に一瞬たりとも生きてゆくことの

出来ないことは当然認識している筈である。着ている着物、食べている食糧、其の一切の生活必需財から文化財に至るまで何一つとして自己個人で造つたものはない。凡てで協同生活に依る産物である。即ちクロボトキンという「相互扶助」の賜物であ。

先にちよつと支那に於て古くから論じられている性善説、性惡説について触れたのであるが、宗教に於ては、善惡の觀念が最も中心となつてゐるからである。孟子の性善説にしても、荀子の性惡説にしても、絶対性、永遠性唯一性なる神という觀念に支配されているが故に、善惡何れかに定めるといふ誤りを犯すことになるからである。現実には何れとも判断は下されないのが事實である。最も神に近く聖人と仰がれた孔子は人性に就いては寧ろ中庸を主張している。彼が弟子達に「性相近し、習遠し」といふ「教ありて類なし」と諭し、人の本性には大差なく、ただ教育、修養の如何によつて相違を生ずると論じてゐるのは、人間自身の努力と教育により善惡は變ることを意味するものであらう。その後公孫尼子等は「性善有、惡有」と主張している。この論からしても人性には善もあり、惡もある。若し人の善性を修養すれば善となり、性の惡を養へば惡となる。そこに人間の努力、研究修養が必要となり、或るひは消極的には他力本願的の宗教現象も起るのである。

## (四)

ここに宗教哲学の大家である波多野精一先生の著書により、哲学者のいう宗教的な専門的用語を引用して、このこ

とに就いて私見を論ずることにしよう。

先生は「宗教哲学序論」の第二章、誤れる宗教哲学、一、合理主義 二、超自然主義 三、バルトとブルネルを論じ第三章 正しき宗教哲学という見出しで論じられている。

合理主義の場合、カントの認識論を基本として「一般認識と共通の方法を、従つてあらゆる他の存在に關して用ゐられると同じ方法をそのまゝ神に適用する」とし、「さてかゝる認識は概念的思惟によつて行はれ概念的表現を遂げる目的動作である故それによつて神を対象とする学を実現しようとし又しかなし得るとする立場は「合理主義」(Rationalisms)と名づけることが出来よう」と前提して論じられている。「カントの立てた神の概念は一切の存在の總体を内容となし、従つて理論的認識のいつも変らぬ究極の理想を言ひ表はしたものに外ならぬ。彼は神を対象とする認識の不成立をこの理想に到達し得ぬ人間の認識能力の不完全にのみ歸し、若し理性が直觀的となり得るならば神を認識し得るであらうと考へた。トマス・アクイナスに源を有するこの思想は、理論的認識の道を行くべき所まで行けば神に行着くといふ信念の上に立つものであつて、見紛ふべくもなき合理主義の思想である。尤もカントが觀念主義的認識論の立場に立ちながら (Ding an sich) 物自体の名の下に實在の概念の有意味を肯定したことは、現實の生の示すがまゝ又要求する通りの事態を或程度まですなはに承認したものとしてむしろ賞讃に値ひする。觀念のみの世界というが如きは空想と現實との區別を忘れた哲學者の誇大妄想に過ぎぬといふべきであらう。今仮に純粹なる反省の立場にあるならば一切は稀薄化して觀念となり實在的實體は、幻となつて消え失せるであらう。かゝる立場においては

もとより「物自体」は矛盾の概念に過ぎぬであらう。しかしながらそのことより導かるべき教訓はむしろ觀念論の拋棄の必要である。カントの「物自体」の説において咎むべきはむしろこれが實在の體驗をもつと素直に承認し、もつと徹底的に考慮することが出来なかつた点に存する」と述べられている。波多野先生の奥深く持たれている考えは十分に理解されないけれど、先生の云われることは当然である。即ち合理主義の根本にはカント哲学の中に、先天的の「理性」を前提としているのである。唯物史観は、人間自身の頭脳の永年の歴史的発展からして理性は生れたのであるから、理性を生んだ人間自体の方が、理性を元とする合理主義で証明されたとする神の存在などは、單に觀念的の幻である即ち人間が理性を産み、その理性から創造された形式的、觀念的のものであるからである。

たゞこゝで注意しなければならないことは、眞の唯物史観は唯物論とはちがつて、物質の發展によつて創造された諸觀念が、全然無いというような錯覺を起してはならないことである。昨夜の夢に、左右されて今日の一日の行動が云々されるということが現實にあるが如く、人間が産み出した觀念が人間を支配することもあるという事實を否定するものではないのである。何故なれば觀念論者が存在する限りはこの一時的の現象は残存するからである。

次に二、超自然主義では次の如く述べられている「この立場は神の超越性を基本的原理とする。神は人間本来の認識能力即ち理性を全く超越する。このことは通常人間の有限性より乃至一層宗教的に理解される場合には罪惡より導き出される。立入つて具体的にいへば、有限性乃至罪惡のために人間の認識は感性的知覚より発足せねばならず、又飼くまでもその出発点の制約と束縛とに甘んぜねばならぬ。感性的ならぬ存在であり感性的認識を超越する対象であ

る神は人間的能力によつては不可認識的である。幸ひにも超自然的啓示が（宗教的理解によれば、神の恵みによつて）与えられる。これは人間の本性よりしては、又世界の出来事を支配する自然の法則よりしては全く不思議不可解の出来事であるゆえ、警異（奇蹟）と名づくべきものである。かゝる啓示と警異とにもとづく教義は直接に神より發したものとてその源にふさわしき絶対的權威を有する。かかる權威に服従して特定の命題を真と承認する働きが信仰である。神の超自然的の光明より發し信仰によつて人間の有を帰する神聖なる認識、神の学即ち神学は、その確実性とその対象の品位において理性の自然的光明によつてのみ照らされる自然的認識とは全く類を異にする。超自然知と自然的啓示と理性、信と知との対立及び峻別はかくの如く神の超越性と緊密なる連関を保ちつつ超自然主義の中心思想をなしてゐる」と説明している。この理論は大体シュライエルマッヘル以来用いられたものであり、而してそのような超自然的の神の實在を論理的に証明せんとしたのか中世紀のあの有名なアンゼルスであつたといえる。實際は真の論理学ではなくて、絶対的の「啓示」と「信仰」にすぎないのである。啓示とはカントの無上命令の如きものである。信仰とはその啓示への絶対服従である。波多野先生も曰く「啓示及び信仰に基づく神学——自然的と區別して特に「啓示的神学（Theologia revelata）と呼ばれるもの——は文字通り神学に関する学であり、その目的は神を直接の対象となしつゝ一般の理論的認識と同じくその対象について概念的思考による理論的判断を獲得するに存する。この点は超自然主義が——通俗的形態を取る場合に特にさうであるが——世俗的存在に関し自然現象や日常の出来事に関してまでも、場合によつては自然科学その他専門諸学を無視乃至排斥してまでも——例えばアメリカに於いてダーキ

ンの進化論を排斥した如き（筆者）超自然的啓示による従つて例へば特殊經典の文字そのまゝに従ふ理解や説明を押し通さうとする暴挙にまで退化することによつて明かに暴露される」と論じられている。即ち觀念的の神という權威に對する服従、従つて判斷の理論的確實性及び普遍妥當性を保証せんとする合理的手段を、換言すれば理性の要求する研究方法を用いず、むしろかくの如き方法を斥けて行ふ服従——これこそが信仰なのである。

三 バルト (Karl Barth) とブルンネル (Eril Brunner) の項に於いては一の合理主義即ち論理的に觀念的の神の存在を説明せんとする宗教学と 二、に於ける理論に捕らはれることなく、超自然主義的の絶対服従即信仰するというそのことを宗教とする説との両者を如何に統一して哲學的に理論づけるかの問題を批判されている。

「神学の任務を神の直接の理論的認識に置かず宗教的団体（この場合キリスト教会）の宣教の内容（及び方法）に關係する理論的論究に置く点においても、従つて（吾々の用語に言ひ換へれば）宗教の對象としての神を對象とせず人間の宗教的（この場合キリスト教会）生き方存在の仕方を對象とする点において両者——バルトとブルンネル（筆者註）——は全く一致する。シュライエルマッヘルに對する強烈なる反對の態度にも拘らず一層広き展望を取るならば両者とも等しく彼によつて開かれた新らしき近代的神学の世界に屬する。両者は最近まで全く歩調を共にして働いたしかるに自然的神学の問題を繞つて彼等はつひに袂を分つに至つた」と前言し、「自然的神学の問題は、啓示と自然（乃至理性）との問題であり又同時に宗教（福音）と文化とのそれである」中略『自然的神学の問題に關するバルトとブルンネルとの間の相違は決して大なるものではないがたしかに存在する。それは簡単にいへば、福音と自然及び文

化との關係に關する學問的論議の可能性についての一般的なものと、その關係そのものについての特殊的なるものの二つに區別し得よう。第一の点に關してはブルンネルが普遍的又は自然的啓示に關するキリスト教的教説 (Christliche Lehre von der allgemeinen oder Natur-offenbarung) の可能性と重要性とを主張するに對し、バルトはそれを否認し、第二の点に關してはブルンネルが普遍的啓示と特殊的啓示との從つて又創造の恵み (Schöpfungsgnade) と救済の恵み (Erlösungsgnade) との區別を肯定するに對して、バルトは簡単にそれを否定する。」と説明されてゐる。

バルトが自然的啓示の可能性と重要性を否認したということは當然のように思う。自然的啓示というのは前に述べたように、一種の絶對性の觀念に捕われた無上命令の如きものであるが故に、可成り知識の素養をもっているものが人間自体が自らの生活の不安からして、願望的希望からして勝手に絶對性を創造して、而もその無上命令で、理窟無しに、人間の知識を無価値として、それに服従するが如きは、知識人の認めることにはならない。苦しければこそ、或る一個の人間が、自分の安心立命のために、自己満足の形でそれを信仰することは勝手であるが、それをもつて客觀的に宗教学として理論づけるわけにはいかないのである。信仰は何処までも、個人的、主觀的の慰安の状態である。次に普遍的啓示と特種啓示とのことであるが。普遍的啓示とは、人間全体というか、自然全体というか、凡ゆるものに与えられたとする所謂彼等宗教学者がいう、創造の恵みをいふ、特種的啓示というのは人間個々にある不完全性から生ずる凡ての罪を許すという、救済の恵みをいつているのである。この兩者の區別に對してブルンネルは肯定し、バルトは否定しているというのである。バルトは驚嘆に値ひする集中力と徹底力とをもつて救済における以

外の啓示と恵みとを否定しようとする。何故かなれば普遍的啓示を認め従つて人間性に固有の意義を許すことは、畢竟神の全能より何ものかを削減し救済の恵み以外のものに——この場合人間性に——救済を成遂げる独立の能力を付与するに等しい。これは神と人間との協力を認める点において自力主義の変装したるものに過ぎない。人間の存在は罪人であるということにつきる。神の窮み無き恵みの前には「人間は人間であつて猫ではない」というが如きは語るに足らぬ全く無意義な事柄であるとするのである。これに対してブルネルは普遍的啓示の思想が聖書並びに教会の伝統によつて一斉に支持させているを説いて自説の傍証となしたる上、罪人であることによつて失はれるには至らぬ人間性に固有なる特異の地位を許さず、従つて自然及び文化即ち創造における普遍的啓示を認めぬことは、結局救ひのみならず罪そのものをも不可能にをらしむべきを説く。さて創造の恵みの認識は救ひの恵みの認識において又それを通じてはじめて得るのであり、従つて自然及び文化をその真の意義において理解することは救はれたるものの特権であるに違ひないが、そのことは決して救済とは別にそれとは独立に罪人にも然らざる者にも共通に存在する人間性の特異の意義を否定する理由とはならない。人間性の本質である人格即ち主体であることは、神との關係に立つことであり、従つて神の言葉を聞いて従う能力であると同時にそれを聞いてしかも背く能力でもある。人間であることは罪人であること、救はれたるものであること、の共通の基礎であり、従つてかゝる人間性において現われる神の啓示と恵みとは普遍的として罪の救済において現はれる特殊のものより區別さるべきである。若しこのことを認めぬならば、人間が神に対して責任を有するという基本的事実は不可解にをわらねばならぬ。責任はそれを負はせる



神の働きだけで成立つものではない。責任を負ひ得る即ち神の言葉に答へ得る人間があつてはじめて成立つのである。以上がブルネルの主張の要旨である。

これらの問題に対して、波多野先生の結論を引用してみよう。「神学特に自然的神学は哲学を要求する。(例へば中世に於いて、それまで只信仰のみによる実践的宗教とされていたキリスト教に、一方はプラトンの哲学を採用し、又他方に於いてはアリストテレスの哲学を入れて、ニカイヤ回議に於いて始めて三位一体の組織的のキリスト教会を設置した如き——筆者挿入——)。トマス・アクイナスがアリストテレスを指導者とする哲学的論究を神学体系の礎石に据えたのはこの事理の内面的要求に従つたのである。元来哲学は流行の風俗や物品などを取捨するが如く好みや偶然に委ねらるべき事柄ではない。自らの真面目なる研究を必要とする。これは神学を研究する個人にとつては時として事情や能力の許さぬことでもあらう。神学そのものにとつては、従つて事情や能力の許す個人にとつても、斥けてはならぬ忽にしてはならぬ重大なる責任である。しかし哲学の世界に足を踏入れるや否やここに決定を促す重要問題が直に研究者を迎える。神は直接に理論的認識の対象となし得るか又はなすべきか——これがその問題となる。肯定的答案を提出した合理主義は誤謬としすでに斥けられた。すなはち吾々が理論的論究の対象となし得るものは、神を相手として生きる吾々自らの生き方、神の言葉の表現として象徴として成立の人の言葉の内容、キリスト教的にいへば、キリストにおける神の恵みの啓示に信仰と服従とを獻げるものゝ生き方、従つて究極は神及び神の恵みの体験の内容のみである。これとの関係において問題とされる自然及び文化も人間の生き方として究極は体験内容として取

扱は、れ、ば、な、ら、ぬ——点線は筆者——。事苟くも経験的科學の權限を超越した以上、何ものも何ごとも觀念的存在としてはじめて理論的認識の対象となり得る。それ故に、自然的科學が若し成立ち得るとすれば、それはキリスト教をも、自然及び文化をも等しく人間の生き方の方面より考案しかくしてこれら二つの生き方の關係連関を研究事項とするものでなければならぬ、しかしキリスト教的生き方はこの観点よりみれば宗教的生き方に属するものとして理解される故に正當に成立ち得るであらう。自然的科學は宗教を、自然的並びに文化的生との連関の観点よりして、従つて生の全体においてその占める地位と現わす意義との観点よりして、考察し理解する哲學を土台として支柱として要求せねばならぬ。かくして誤つた宗教哲學と正しく成立つであらう。自然科學との検討及び批判はすでに論究の目標として吾々の眼界に入り來つた正しき宗教哲學の姿に一段の鮮かさを添へる。」

(五)

これまで有名な宗教哲學の考えを述べて來たのであるが、それは如何に宗教というものに就いて永い間われわれ人間にとつて不可思議なことであつたか又はその實在論的であらうと、方法論であらうと或ひは認識論的であらうと、時代により又は場所によつて宗教の説明或ひは解釈が異つて來たかを知るために一つの例として引用したのである。併し歴史的に研究して來た結果は、たしかに各論説が或る点で發展しているといふことは出来る。或る意味といふのは、より科學的方向へ發展していることである。もつと強く言ひ表わせば、絶對者という偶像者に対して、何等の疑

問をも拘くことなく、無条件に絶対服従することなく、いわば日本でいう「鰯の頭も信心次第」という一般的の信じ方が漸次なくなりつつあるということ、即ちそのような神はないという無神論者が増加しつつあるということである。従つて現代の科学的知識の發展に従つて唯物史觀論者が多くなつたことを示すものといえよう。例え無神論とは云わなにかまでも、宗教への関心がその尊敬というか、信仰というか、神に対する人間的の態度が偶像的崇拜の絶対的服従から漸次人間自体が自由に開放されて来たことである。それは恰も筆者が常によく採る例であるが、人間の發育過程と同様である。われわれ人間が母体内での物質的進化から赤坊(baby)として母体から離れ、動植物のみならず、空気とか水とかの自然的環境の協力によつて、幼児(child)となり、人間の形体までに發展してくる。併し犬も猫も、又はオモチャさえも自分と同じものとし、これらのものと話しかけているという、自我と他者をも意識しない過程にあつて、否定できない。真も善も惡もない、美醜もない、自然そのものの状態に近いのである。やがて幼児が兒童(boy and girl)まで成長即發展すると、というのは物質的即肉体的に發展することにより、男性と女性の區別を知り。人間と他物との區別を知るのである。それは頭惱に反映する感管的知覺のより高度の發展によつて意識が生ずるからである、両親といふ人間の努力で、しかもその父も母も、自然の中で、一切の環境の相互的の(これも自然的であり必然的である)物質力によつて發展したのである。決して絶対者といふオント学的觀念的、神仏が創造したのではないのである。

そもそもこのような、われわれが事実存在している物質的のこの自然というものと、われわれ自体の頭惱があればこそその理性、悟性、判断力、意識というものからして、その自然を離れたプラトンのイデアの世界を切り離したとい

うのは何故であるか。海岸の砂、山の樹木、空の空氣其の他諸の他物と共に、自然の中に生存する人間が、人間以外のものを対象とか客体とか称し、自らを主体として、而も人間が凡ゆる他物を指導するとか支配するとかいう歴史的の諸現象（特に社会的現象をいう）を見て、これは何か人間に絶対なる力が即精神があるからであると信ずるのは当然であるからである。然らばかゝる人間の他物にない力は如何なるものであるか。どうしてあるのか。如何にして造られたのであるか。これが哲学の始まりであり、學問の出発点である。そして哲學的思考力又は學問的研究がより足らざるもの、弱きものは、ついには、不可知として、神仏を想像し、やがては自己催眠術的心理狀態からして神仏は存在しなければならぬ否存在するものであると信仰するようになったのである。併しながら人間の努力、研究、科學の發達に従ひ、太陽の神、月の神、星の神が物質的のものであることが分り、雷が電氣の發見によつて不可知が可知になる時代に發展すると、唯物論的の考え方が覺めてくるのである。併しそれでも人間というものの以外に大自然は無限的に巨大なるもので、人間の研究では未だに解決出来ないものが次から次へと現はれて来るので、人間の自己保存的の諸欲望からして、不満、不足、不安が残るので、矢張りこれらの人間的の要求からして、消極的にそれらの不安を逃れるべく、人間自身が絶対者なる希望、理想、憧憬として、觀念的のものを創造するのである。従つてある哲學者をして（筆者はアンゼルスであつたと思ふ）人間が不完全であるというのが真理であるから、不完全があるとすれば完全のものがあるべきだ、という勝手な論理で神の存在を証明するということになるのである。

このようにわれわれの存在する世界と、われわれの認識力の原動力である、理性、悟性、判断力意思の如きものの

創造した觀念の世界とを區別したといふことは、古代中世のみならず、近世にいたるまでの哲學者の大部分であるが、カントはこのことを最も、明確に表現して、認識論として、知の世界、情の世界、意の世界とに分析し、知の世界を純粹理性批判という著書で發表し、十二範疇を創作して科學の世界の、曲りなりとも確實性を述べるのであるが、それでも物自体 (Ding an Sich) は不可知のものとしている。人間の認識力で一度で、短時間で、人間以外の森羅万象を知らうとすることが、人間の自認れである。永い歴史の努力によつて人間の頭腦に反映された自然のものが、研究の結果、可知のものとして、他の不可知の中に人間自身が入りこむことでなければならぬ。歴史の發展を觀るならば、巨大なる宇宙の中で如何に人間が自然の不可知を解いているか。科學者等はこれ又自惚れて、人間が自然を征服したとまでのことをいうようになり、人知により、地球は狭きものとなつた、何故かなれば交通機關の發達により」と。カントにとつては客觀と主觀、物質と觀念が全く別のものとして相對立した如く、感覺と思惟、直觀と悟性も對立し、内容と形式、受動と能動とが互いに明確に區別せらるべき概念であつたように、自然と理性、認識と實踐もまた全く相異なるものとして對立せしめられた。ここにカントの哲學の限界があるのである。このように、現實というものとは一つの有機的の關連があるものを人間の研究の對象としてその研究の便宜のために区分したり分析することに吸々とし、而してそのものを觀念化して各々を對立せしむることに何か無理があるのではあるまいか。である故にカントも先づ第一に科學の確實さを希望するために、先天的或ひは先驗的のものとして種々のヤテゴリーというものを造りあげて知の世界即科學の世界を純粹理批判として論じたのであるがそれは何処までも著書名の示すごとく批判に終

るとなり、物自体という疑問を残すことになつたのである。従つて知で解決出来ない別の意の世界に入らざるを得なかつたのである。「われなさざるべからざるが故にわれ行ふ」という無上命令を生み出して、人間の必然的發展からして、必然的に表われる欲求としての意志の世界を考えねばならぬことになつたのである。それが即ち彼の實踐理性批判である。誰れが教えるともなく人間にはなさねばならぬという、自らの努力の動因たる意志世界を考へたのである。親がいおうと、先生がいおうと、誰がなんといおうと自分はこうやるのだというその人間の必然的の動きを彼は意志だと名付けた。そしてこの人間の必然的に体内から發する力こそ人間の「自由律」だと主張したのである。

この人間の個人的に發散する自由という意志力で人間が働くのであるけれども、第一の純粹理性の知の世界、科学の世界、自然的外界が、そのような個人の間人的の自由を無限に許す筈がない。そこに知の世界と、意の世界との対立があるという結論になるのである。であるが故にショウペン・ハウエルの如く、カントの區別に対して我慢出来ず、哲学の求むるものは唯一のものでなければならぬという觀念に捕われた哲学はこのカントの無上命令の意志こそ、即ち人間の努力こそ凡てを産むものなりという考えから「意志と現識としての世界」の如き意志の世界の絶対性を主張することになるのである。その結果はどうなつたか、人間自身の必然的欲求である所謂『自由律』を極端に押し進めて行く時は、外界との衝突は免かれないことになる。徹底して行えば、自ら自然を離れなければその極に達しられない。これがショウペンハウエルの自殺的な厭世哲学と称せられる所以である。

カントはこの知の世界の純粹理性と、意の世界の實踐理性との衝突せねばならぬ關係を十分に認識しているのかど

うかは分らぬけれども、併し知を考え即ち自然を考え、その中に生存する人間の自由を強行すれば、人間の悩みは果てしない。それでも自教するのではなく矢張甘んじて生きているということはどうしてであろう。

カントは第三に判断力批判というものを考えざるを得なかつたのである。それが即ち調和の世界、美の世界、芸術の世界であつたのである。知の世界（われわれが数学や物理学を研究している人間の状態）という真理とか不真理をも考えず、そして又自己の欲求する意志の世界の善とか悪をも考えず、これらの一切を忘れて恍惚の世界即ち美しき絵を、ベーエトッベン音楽を聞く、安靜の人間的状态をカントは考えたしたのである。

## (六)

この三者が自然の中に育てられた人間の中に一系としている根本を忘れてはならない。夏目漱石という芸術家は、このカントの知、意、情の世界について、彼は『草枕』の中で次のように芸術的、小説的にお面白く言ひ表にしている「知に働けば角が立ち、情に棹させば流される、意地を通せば窮屈だ、免角世の中は棲みにくい」と。人間が自然の中で、必然的に体内に發展して来た觀念に如何に悩んでいるかの告白であろう。生さんとする人間の物理的の動きは禽獸草木に等しいものであり最も自然的の強さであろう。それが幾万年の経過を通し發展した頭腦があればこそ、他物に秀いでたる意志が創造され、やがては知識を発見し、自の中に人間社会の環境を産み出し、単なる動きは、社会關係からして、目的的の運動として働きが創造されたのである。即ち自然的の動は、目的々の人間の意志の動きと

なり意の世界が創造されたのである。この人間としての意志の働きが、やがては、人間以外の他物との対立的な状態に入るのである。自然を開拓する即ちカルチュアの現象が創造される。併し大自然の中に育てられる人間の意志は無限に達しられるものではない。その状態にある過程で、より頭悩の働き即知能の弱いものが大自然の凡ゆる現象を意識して恐怖の観念を産み出す。然るに生きんとする欲求は必然的に生れている。かくして自の恐怖を逃れるべく、何か絶対的な救ひを願望することになる。太陽の神、月の神其の他ギリシャの神話の諸の神という観念が人間の頭の中で創造されるのである。併し、生きんとする意欲即意志はこの大自然の自己への対立に何処までも働きかけることによつて、次から次へと自然の力を發見してゆくそれが知の世界であり、科学の世界である。かく動き、かく働き、かく努力する過程で、太陽の光りには熱の活動をする万物と、夜の暗黒の静止の状态、或ひは月の光の景色に、一日の労働に物理的の疲労を慰すという現象も生ずるのである。太陽と地球との關係で三百六十五日の一年というものが名付けられ、月と地球の關係から一月という時間、地球自らの動きの昼夜の關係から一日という時間が創造されるのである。又かゝる諸現象からして明暗、陽陰、動靜も造られ、やがては活動的太陽の光と、静止的夜の現象から、積極的消極的の言葉も作られるのである。

ヘーラクリトスの直觀的至言「万物は流転して止住することなし」の如き、物質的には一瞬の休みなき動きの中に、人間は自己の生きんがための、知と意の戦ひ、努力、働きの中に、夜とか、静けさ美しさという調和が創造されねばならない。それが芸術の世界である。



自然の中の人間が社会というものを創造し、これも勿論必然的發展であるが、個として不可能事も協同によつて、自然を開拓していくところに文明が建設されるのである。而し、この人間社会の協同生活の中に今日の善悪は人間が人間關係の間に造り出されるのである。勿論前述の如く人間自身の生命も、一切の他物との關係からして生きているのであるから、眞の善悪は科学的の知即眞不眞を切り離しては考えられないのである。

科学にしても、芸術にしてもまた宗教にしても自然の中の、即大きい意味での物質しかもその物質も決して分子とか原子とかいふ個としてのものではない、一瞬の静止む許されない動き、変化し、進化し、進歩發展して諸現象としてわれわれに絶えず認識の対象を与へるところの諸物質的現象それ自身が物質であるとしての物質が發展して出来たものである。その物質の發展した時と場にあつて人間が知識として、概念化し觀念化し、而して人間が造り上げられた文字に言ひ表わしたのが、自然科学であり、社会科学であり、延びては今日の諸科学、芸術、宗教であるのである。現段階に於いては物質が最高度に發展した動物が人間であるとし、その人間の中で最も發展したのが惱であつて、而もそれは歴史的に自然に發展した来たものであると唯物史観はいうのであるからして、従つて頭悩の働きが發展して種々の觀念を創造したことも自然であり、又必然であらねばならぬ。

故に眞の唯物史観は決して、觀念を無視しているものではないし、又觀念からして生ずる處の宗教現象及び他の現象を否定するものではない。只所謂觀念論者に対して反對するのは以上のべた如く、自然の中で物質の發展に依つて最高に發展したこの觀念が、逆にその觀念が実体の即ち母体の現実を生み出したという錯覚というか誤解を指摘して

いるのである。しかも觀念論者にかぎつて、その觀念を絶対化し、その絶対化された神に人間が絶対服従の信行を強ひたことは、強力に反対するのである。適當の教育を受け、物理化学を習ひ、歴史的の科学知識の絶えざる發展によつてわれわれに不可知とされた大自然が漸次開拓された事実を知らされ、又自ら研究した知識人にとつて、自らを反省したならば、超自然的の神がこの自然を創造したという、あのギリシャ時代のプラトーンが「この現實の世界は、觀念の世界の影にすぎない」など、という説などを信することは許されないことだらう。然るに二十世紀の今日に至るまで、偶像宗拝的の宗教に絶対的の信仰を持つものが存在する、しかも人類の多数にそのような人間があるというところが、如何に現世に害毒をなして居ることか。

最後に、宗教に最も關係のある善惡の觀念について論じてこの論文を結ぶことにしよう。宗教と道德、倫理とは切り離すことの出来ないものである。併し全然一致するものではない。道德と倫理は宗教よりも、より現實的、もつとかみくだいて言うならばより浮世のものである。宗教は最高の聖なるものであるといえる。併し兩者共に事實は、殆んど善惡の問題に歸することが出来る。政治、法律、經濟等すべて社会現象に於いて、それらに關連する諸法則を論ずる場合に基準となるのは善惡の觀念であるといえる。大きくはロシアの政治が善いとか悪いとか、或ひは米国の法律は善いとか悪いとか論じられる。又現在の日本の何々党の經濟政策は善いとか悪いとかも云々されている。そしてこの善惡は無知の人であればあるほど、感情的の理論拔きの善惡を論じている。併し知識人になると其の善惡は、真なのが故に善であり、不真なるが故に惡であると一應は或る程度の差はあるとしても、知的に、故ひは科学的の真

不真を基準としての善惡に發展するのである。こゝに問題がある。政治とか經濟とかを若し人々が、科學的の真不真を基準とするならば、それはより唯物史觀に近いものである、が併し現實はどうであるか、永年の間觀念論的宗教の信仰をもち、即ち絶対服従的人々が残存しているがために、上位に対しては絶対服従の教育を受けているので、ただ主従關係の情實から生れた、神に対し或は君に対しては、従順なるを善とし、反することを惡とする感情に支配されているのである。かゝる処に發展がありよう筈がない。勿論かゝる觀念論があるとしても歴史が必然的に變化し進化した發展して來た事實は觀念論の誤りであることの証明である。只そのような觀念論の多少に依つて歴史も或る場所の或る時に於いての進歩の遲連の差が表われていることも事實であつて歴史に明確に表はれている。

善惡は、神仏が絶対不變唯一の基準によつて定められたものではない。又前述の如く、人性説に於けるが如く、性善説や性惡説と明確に一定不變に定められたものではない。勿論觀念論的、絶対的無上命令的の神を信仰した時代は、善も惡も、教會における、バイブルや、經典又は僧侶の説教の中で定められたものであるとされた時代があつたし、今日でもそのように自分で誤信している者も多数に居る。

善も惡も、われわれ人間社会の中に創造されるものである。われわれは此処で一番大切で忘れてならぬことは、「社会」ということである。社会とは人間の有機的のつながりということである。もつと根本的に深考するならば、人間でも、其の他一切の動植物から無機物の石ころでも、各々それが個としては存在し得ないものであるという考え方である。自然の中に存在する一切のものは凡てが物質というつながりがあるということである。日本は、中国にも米國

にもつながりがあるということである。其のつながりの中で、人間と名付けられた動物の有機的な関係にあるものを社会と名付けたのである。そのような有機的関係を認識している者を、社会性のある人だというのである。

さて善と悪とはこのような社会に創造されたものである。勿論、このことも永い間歴史的に發展して来たものであつて、無知であつた、従つて絶対的觀念即神の奴隸時代までは、上下の神への服従的主従性はあつたが、現実的の横のつながりの社会性は、まだ十分に現はれていなかったのである。このことは今此処では詳細には紙数の關係で述べないが、日本に於いて、君に忠、親に孝という縦の上下のつながりは鉄よりも強い、死んでもよいほどのつながりはあつたが、兄弟は他人の始まりとかで隣りとか友達とか、外人とかいう現実の横のつながりが殆んど無かつたとははいえないが併し弱かつた。即ち倫理道德的の言葉でいえば公德心が日本人にかけていた。日本人というより無知の者には社会性が欠けているのである。それというのも矢張り現在の分業的に有機的に一切が生産され、分配されている文明国で、すべての商品が幾万の人々のつながりでなければ生産し得ないということは異つて、極端に表現すれば、ロビンソンクルーソの孤立で物が作られた環境からしてそのような思想であつたといえる。「環境が思想をうむ」これが唯物史觀の基本的の考えだからそういえるのである。

さてこのような社会に於いて言ひ現わされる善悪は如何なるところに置くのであらうか。私見では、この有機的の社会性を破壊することが悪であり、その社会性を發展させることが善であると主張する。極く通俗的の例をあげて説明しよう。近日、大臣でも、学者でも、一般人でも「彼はいやな奴郎だ、悪い奴だね！」と例へ発言しないにしても、

そういう判断をする場合を考えて見れば分る。その場合決して、バイブルの何条の何章に、或ひは仏教經典の何頁にとか、或ひは教会の僧侶の教えがどうであつたかという観念的無上命令に従つて善惡をいつているのではないであらう。その時の自分の考えを、正直に、卒直に反省して見るならば「奴は他人の迷惑になつてゐる。友人との約束を守らない。親に不孝だ。先生の教えに従はない。親籍の顔を汚す」等々が善惡の基準になつてゐることに気が付くであらう。即ち他との關係、社会的のつながりの關係からして善惡を云つてゐることが事實でせう。

「キリストは人間として、病めるもの、貧しきものを自ら実行したから偉人である。しかも凡人のなし得ない社会性を感じ、社会人の幸福のために現実に行つたことが善であつたのである。彼は心理学も、論理学も知らない。勿論哲学も彼れにはない。キリストは実践的現在の人間であつた。その意味で彼は尊敬されるべきであらう。併し彼が実践した、記録と言葉がそのものに価値があるのではない。それらは価値のあつた行為の表現にすぎない。その価値ある記録即バイブルはその歴史を今日のわれわれに伝える価値は認める。けれども「只信ぜよ、信ずる者は救はれん」と発言しても、キリストを信行するということは、キリストの行ひを信じ、キリストと同様に行うことによつて価値は生ずるのである。しかもその実行も、キリスト時代の実行方法と、今日の実行方法とは歴史的発展によつて大なる差がある。」

知識人から見れば、偶像的宗教は今日では論ずるに足りない。従つて論文の対象にならないといふかもしれない。しかし、それも学者としての或る場所と或る時に於いて冷靜なる反省の場ではそうであらう。けれども多数の学者、

大臣の實際の普ねての生活を見る時には常に偶像的の信仰を表現している。二十世紀の半ばを過ぎた今日、自ら暴飲暴食して身体をこわして病氣にかかり、「アーメン」といふ「南無妙法蓮華經」と叫び「悪しきを払うて、助け給え天理玉の尊」と踊つて只信することに依つて病を療さんとする者が幾万となく存在することによつて、新興宗教は雨後の筍子の如く現われているではないか。悪しき行ひ、病氣も人間自らがつくるのであると、同様に、善き行ひ病を療やし健康になるのも人間自体にあるのである。社会をみ乱だし、悪政即國民を苦しめる即社会性を破壊する政治家が、明治神宮や、伊勢神宮を拜むことによつて許されると思うのが現代の偶像崇拜的宗教の現われである。

これからの宗教現象はどのように發展するであらうか？。その無形の觀念的、超自然の神仏を拜み、しかもその御利益とか恵みを受けるが如きは漸次破壊されていくであらう。それは必然的のものである。否私見をもつてすればこれからばかりではない。人間の何物かに（絶対者神仏の觀念）恐れをなした結果、口でこそ神仏といつていても、神仏を拜んでいるのではない。苦しい日常の生活の自らの慰安として、美味しいものを造り（具物）美しい花をながめ（仏段の花）静かなる音楽を楽しみ（讚美歌）香りの線香を、神の名の下に捧げているのである。この段階は最も今日までの知人がやることである。拜んで病氣を癒すとか、お金を賭けることかの、お利益談いの如きは愚の愚である。宗教は安心立命であり、そしてそれは神仏を信じ、神仏から恵まれるものではない。自然の中で人間自身の努力労働の生活の中で、その労苦を一人間社会の協同生活の中で創造された、音楽、舞踊、映画、劇、其の他の芸術に慰安を求めるのと同じ状態に發展していくであらう。勿論、芸術も歴史的に發展するので、現在のジャズ式そのまゝが

続くというのではない。凡ゆるものが發展するものであるからである。現実には十二月廿五日には東京銀座のみでなく幾百万の国民が、クリスマス、デコレーションを催している。勿論夜通しダンスパーティーも開く処もあるであらう。或ひは聖なる神よと旧来の宗教家はこのようなことを嘆くであらう。しかし唯物史観から見れば、それであるのである。いや善悪ではない、それが必然的の發展である。人間は自然の中に労働し、しかもそれは社会性の協力で、而して自然を研究し、自然を開拓して、而して肉体的の労苦は、人間同士の社会に、人間自ら創造した芸術の中に慰安を求めるのである。芸術は、耳の音楽、目の絵画等にと人間の或る区別されたものゝ慰安であるが、宗教はこれら一切を包含した身心共にの慰安であるといふところに強いて差を求められるであらう。唯物史観上より見たる宗教現象は、人間自身が自然の中に創造した、人間自身の慰安として芸術現象に發展していくと結論するものである。

#### 本論文を書くにあつたの参照文献並著書

- |            |              |
|------------|--------------|
| 小泉 信 三     | 共産主義批判の常識    |
| マルクス、エンゲルス | 神聖家族         |
| エンゲルス      | 史的唯物論について    |
| レニーン       | 唯物論と経験批判論    |
| ブレハノフ      | 唯物論史         |
| 永田 広 志     | 日本封建制度イデオロギー |
| 柳田 謙十郎     | マルクス哲学の基本問題  |
| 牧野 周 吉     | 西田哲学との対決     |

デボリーリ  
宗井伯寿  
波多野精一  
西田幾多郎  
古野清人  
片山正直  
同文館発行  
カソト  
石原純

經驗批判論  
仏教論理學  
宗教哲學序論  
意識の問題  
宗教社會學說 研究一  
宗教の真理  
哲學大辭典中東洋哲學の部  
純粹理性批判、實踐理性批判、判斷力批判。  
自然科學の世界像